

夜、でしゃばる悲哀

藤井颯太郎

トノの夢を見た夜、わたしは金魚を探しに海までやってきた。けれど、足の指先を呑んだ波の冷たさに、やっぱり帰ろうと思ひ直す。まだ乾いていない足に靴下を履かせようと苦心していると、わたしを引き止める男の子の叫び声が聞こえてきて、わたしは振り向く間も無く、砂の上に倒された。

※

三日前、トノが死んだ。トノはオデコが変な模様の猫で、偉そうにふんぞり返ってお腹をかく姿が殿様みたいだから(トノ)と名付けられた。トノは光るものが大好きで、よく水槽の前に座り、金魚の鱗が光るのをじっと見ていた。わたしもよくその隣に寝転がり、一緒に金魚を眺めた。

トノが死んだ日の夜も、トノの隣で眠った。いつも濡れていた鼻先は、もう乾いていて、わたしの視界を湿らせる。翌朝、目覚めるとトノは隣にいなかった。全てが夢だったとわかって、トノを撫でようと家の中をうろつくわたしに「お父さんが朝から燃やしに行ってくれた」と母は言った。

父は優しい顔つきと外ヅラの良さに反して、家族のことは徹底的に自分で決める人だった。門限も食事も、わたしの友達さえも、父が決めた。自分がなぜ水槽の金魚を眺め既視感を覚えるのか、そのとき理解した。

トノが死んで三日目の夜、トノが夢に出てきた。声を上げて泣きついたわたしに「あの海で泳ぐ金魚がみたい」と、彼は言った。わたしは十四歳のころ一度だけ、トノと家を出たことがある。アテもなく一時間ほど自転車漕ぎ続け、海へ辿り着いた。トノは「あの海」のことを言ってるんだ。夢から醒めるとわたしはすぐ身支度を整え、両親の目を盗んで家を出た。あの海で泳ぐ金魚を探すために。

※

数時間後。わたしは海辺で年下の男の子にしこたま怒られている。彼は、わたしが死ぬために真夜中の海へやってきたのだと思っただけならいい。あまりに真剣に怒られるの

で「金魚を見にきただけです」と、つい口走ってしまった。男の子は硬い表情のまま「いるわけがない」と冷たく言い放った。何も言えず、お辞儀をして去ろうとすると「こんな浅瀬にはいないよ。ついて来て」とだけ言って、男の子は遠くに見える舟場へ向かって歩き出した。

遠のいていく浜辺を舟の上から眺めながら、わたしたちは長い間沈黙していた。突然、男の子が「ここへはよく来るの」と聞いてきたので、わたしは「昔、一度だけ」とトノと家出した時の話をしてみた。

家出に気がついた父はしつこく何度も電話をかけてきた。トノは着信のたび画面が光るのが気に入ったのか、手で画面をタッチして電話を切ってしまった。父からは何度も何度も電話がかかってきたが全部トノが切ってしまうので、わたしは何度も何度も笑った——そんな話を、男の子にした。男の子は水面を眺めながら、静かに聞いてくれた。

「もう、浜に戻ろっか」

トノの話をして、心が少し軽くなったからか、トノが夢に出てきてくれた意味がわかった気がした。トノはこの男の子と引き合わせるために、あんなことを言ったんだ。

「折角だからもう少しだけ見ていこうよ」

水面を眺めたまま男の子は言った。はじめは何のことを言っているのかわからなかったが、彼の視線を辿ってやると、理解した。数えきれない金魚の群れが鱗を鈍く光らせ、舟の周りをゆったりと泳いでいた。わたし達は、なにも言わずその光景を眺め続けた。

携帯電話の振動で我に返った。どれくらい時間が過ぎただろう。家出に気付いた父親からの電話だとすぐにわかった。矢継ぎ早にまた電話がかかってくる。ポケットから電話を取り出すと、着信を知らせて画面が光る。その光を見るや否や、男の子が勢いよく電話を弾いた。なにが起こったのかわからず驚くわたしに、男の子は「つい」と、恥ずかしそうにお腹をかいた。携帯電話は海へ落ち、その音に驚いた金魚の群れともども、水底へと消えていった。

